仁川国際霊園における在日コリアンの墓の考察

渡　辺　正　恵

目　次

はじめに
第1章　仁川国際霊園について
第2章　仁川国際霊園の墓の実態
第3章　被葬者について
第4章　通称名（通名）について
第5章　本貫と本籍地について
第6章　宗教について
第7章　家紋について
おわりに
参考文献

はじめに

韓国での埋葬は個人の土饅頭が基本である。最近では，その規模は小さくなり，団地のように造成された墓地や，ロッカー形式の墓も作られるようになったが，基本的には個人墓である（図1，2，3参照）。在日コリアンの1世は朝鮮半島に自分の墓を作ることを望む人も多く，遺族の間で，故郷に作るか日本に作るかの葛藤が強かった時代もあった。しかし，朝鮮半

島に墓があれば，その墓守をすることは現実的に難しく，世話をしてくれる親戚とのつきあいも疎遠になる傾向があり，今では日本で作られるようになっているのが実態である。

日本で作るにあたって，墓は朝鮮式に個人墓で作っているのか，あるいは日本のように家単位で作っているのか。在日コリアンが多い阪神地区の中でも，初期の段階から日本で墓を作り始めたと思われる仁川国際霊園に注目して，そこにある墓に表れている在日コリアンの意識とその変遷を考える。

先行研究として李仁子の「異文化における移住者のアイデンティティ表

図1　韓国における土饅頭のイメージ（著者作成）

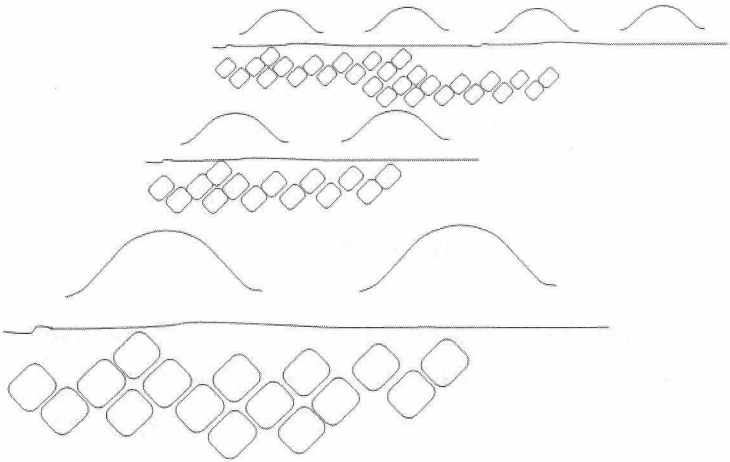

図2　韓国における団地形式の土饅頭のイメージ（著者作成）

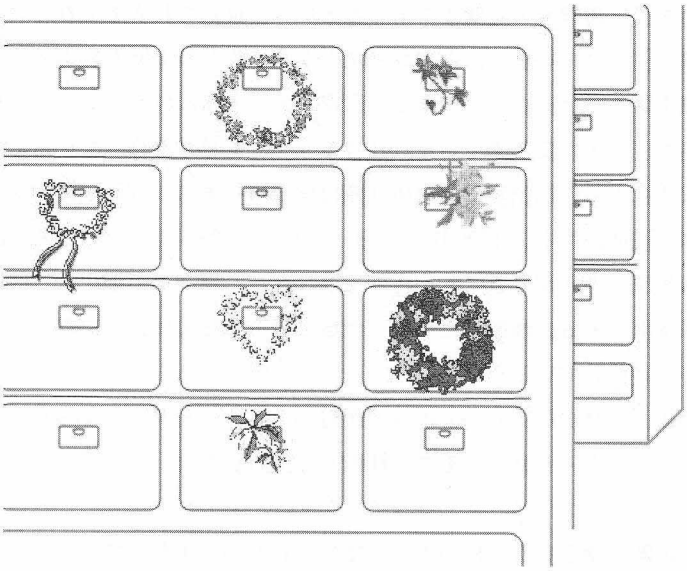

図3　韓国におけるロッカー形式の墓のイメージ（著者作成）

現の重層性 ―― 在日韓国・朝鮮人の墓をめぐって ――」（『民族学研究』61－3，1996年12月）があるが，調査対象が在日韓国・朝鮮人専用霊園であり，日本の一般霊園の研究は存在していないので，今回一般霊園の例として仁川国際霊園を調査して，墓に表現されたものの考察を行った。

第1章　仁川国際霊園について

戦後在日コリアンは，地域の共同墓地で墓を作ることができなかったといわれる。実際，仁川国際霊園は西宮市にあるが，隣接した宝塚市内の小浜，仁川などの共同墓地では在日コリアンの墓を見ることはない。聞き取りによると，骨のやり場に困った在日コリアンは檀家となっているお寺に預けたりなどしていた。住職によっては，骨は預かるが墓は作らせないと

ころもあり，裏檀家の名簿まであったという。最近では寺でも在日コリアンの墓が作られているが，在日コリアンが墓を作りはじめた霊園として仁川国際霊園を挙げることができる。「国際」という名が示すように，外国人の墓も受け入れる霊園であり，在日コリアンも墓地を作っている。

西宮市にある仁川国際霊園の生活圏は宝塚市にある。同じ武庫川沿いには宝塚市役所がある。1920年代に20余万人の朝鮮人が働いた武庫川改修工事の現場，四工場（通称ヨンコバ）にも近く[1]，現在その地には，韓国民団宝塚支部がある。隣接した宝塚の地域では今もその周辺には在日コリアンが多く在住している。

このように歴史的に考えて地理的距離からも，在日コリアンの墓の存在が多いことが考えられた。そこで注目して調査した。

仁川国際霊園という名称がどうして作られたのか事務所でも確認はできなかったが，多様な宗教の合同碑があるなど，バラエティに富んでいる。墓全部は3,000ほどである。無宗教，仏教，キリスト教，天理教など多様な形の墓が混在している。キリスト教のメッセージの込められた碑もいくつかあり，そのひとつに「わたしたちの国籍は天にある」と刻まれた碑がある。それは個人の墓と間違えるような位置と規模で作ってある。建立日の記載はないので，この霊園の初期のものかどうかはわからないが，国際霊園というネーミングを改めて思い起こさせる。

調査の前に「国際」という名前から多様な外国人の墓があることを想像していたが，実際には中国の人とわかるものが1基だけであった。あとは韓国・朝鮮名のもので他の外国の人のものは見当たらなかった。この霊園

1） 1920年から8年かけて行われた武庫川改修工事の工区最後の第4工事場がそのまま部落名になった。（鄭鴻永「歌劇の街のもうひとつの歴史　宝塚と朝鮮人」神戸学生・青年センター出版部　1997年）

の設立当時，墓を探していた在日コリアンには魅力的な霊園名であったであろうし，また現実そうなっているのをみると「国際」という名前が在日コリアンの墓を受け入れることを念頭に置いたものかという推測もできるが確認はできていない。

この霊園の設立時期を事務所に何度か確認をしたが正確にはわからなかった。西宮市に問い合わせたところ，1964年に許可が出され，1965年の地図[2)]には掲載されているとのことであった。在日コリアンの墓の中で一番古い建立年は1965年であるので，だいたいこの時期に霊園が営業を始めたと思われる。

第2章　仁川国際霊園の墓の実態

仁川国際霊園事務所によると墓の総数は約3,000であるが，2010年6月から2011年1月までの調査によると，そのうち在日コリアンとわかるも

表1　墓の年代別変移（形態，本貫，本籍地，通称名）

建立年	墓の数	墓の正面			本貫の記載	本籍地の記載	通称名の記載
		個人墓	夫婦墓	合葬墓（○○家，先祖代々等個人以外の表現をしているもの）			
1960年代	21	3	0	18	8	3	3
1970年代	52	5	0	47	25	11	21
1980年代	8	0	0	8	5	2	4
1990年代	9	0	0	9	3	2	4
2000年代	9	0	0	9	5	1	6
不明	6	2	0	4	4	1	4
合計	105	10	0	95	50	20	42

2010年，2011年筆者調査により作成）

2）1940年当時，仁川国際霊園は尼崎市であった。1965年4月市域の交換により，西宮市となった。（西宮市情報公開センターによる）

のは105基であった。（表1，2参照）総数の約3.5パーセントを占めている。仁川国際霊園を取り巻く，西宮市や宝塚市，伊丹市の在日コリアンの割合はそれぞれ1パーセント前後（兵庫県統計資料ホームページによる）であることを考えると割合としては多い。1960年代後半から1980年にかけて，墓地を探していた在日コリアンが個人的に情報を得て，墓を当霊園に建設したのではないかと想像される。

第3章　被葬者について

個人ではなく○○家の墓や先祖代々之墓が圧倒的に多い。これは韓国では個人墓を基本とすることと異なっている。その理由として，日本では土地や値段の問題があり，家族すべての墓を個人単位で作ることはできないことが考えられる。この1970年代までは個人の墓があったが，その後は年代不明を除くと，すべて複数の人が同じ墓に祀られている。つまり「日本」の土地ということの影響がある。

表1を見ると個人墓が10基あるが，夫婦と思われる二人が祀られているものが3基，複数が祀られているものが2基あり，純粋に個人墓といえるものは5基だけである。

刻まれた苗字が違う二人の場合，夫婦関係と思われる。3人が祀られている場合は，夫婦またそのそれぞれの母親は姓が違っているので，それらの間柄を没年で推測するしかできない。

墓の建立日と没年から判断して，墓の主は在日1世，あるいは1世に近い在日2世と思われる。

第4章　通称名（通名）について

通称名：在日朝鮮人の通称名とは，まず日本人風の氏名を指す。解放後日

本にとどまった人々は，朝鮮名を名乗ることによって受ける差別を避けるべく，創氏改名によって強制された日本人風の氏名をそのまま使用したり，新たに採用した日本名を名乗った。（国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会編「在日コリアン辞典」明石書店　2010年）

1960年代までは21基のうちわずか3基だけに通称名が記載してあったが，1970年代では52基のうち21件に記載がある。1980年代，90年代は墓の建立自体が少ないが，割合でいうと半分に通称名の記載があり，2000年代に入ると半数以上に通称名の記載がある。記載のしかたも　①表が本名で裏に通称名の記載がある。②墓に記載はないが墓の敷地に入る門に記載がある。③表が通称名だが，裏に本名がある。などさまざまである。建立者の中に本名と混じって日本名が刻まれている場合もあるが，これは通称名ではなく，日本国籍を取得したための本名である可能性もある。上記に挙げた①～③の場合も同様である。

第5章　本貫と本籍地について

本　貫：祖先発祥の地。姓氏の種類が少ないところから，姓氏と組み合わせ金海（キメ）金氏，韓山（ハンサン）李氏などと表記し区別する。（小学館，韓国・金星出版社刊「朝鮮語辞典」）

ほとんどの墓が本貫についての記載があるかと思ったが半分ほどに留まった。本貫が同じ親族では，祖先発祥からのすべての自分たちの一族を記載した族譜を持ち，同族意識を共有している。その本貫を墓に書かないのは，自分たちの代より前のことに関心がない，韓国との親戚とのつきあいがあまりない，などのことが考えられるが，あるいは本貫も本籍地も知

らされていないという場合も考えられる。

本貫の地名と本籍地は必ずしも一致しない。このことは祖先発祥の地から移動していることを示しているが，これは韓国でも同様である。

第6章　宗教について

表2のように家紋，宗教に注目して墓の年代別変移を記したが，墓に紙傍（チペン）と同様の記載が刻まれているものを儒教的とした。本来，紙傍は祭祀に当って使う紙で作った位牌である。（小学館，韓国・金星出版社刊「朝鮮語辞典」）韓国では墓にそれを書くということはないとされる。

紙傍（チペン）の書式例　（男性）顯考學生府君　神位

（女性）顯妣孺人（本貫）（姓）氏

（「ウリナラの冠婚葬祭」による）

全体的に見るとだいたい半数近くに紙傍に倣った書式の記載があるが，全体を占めるには至っていない。在日コリアンとしての体面を表現する唯

表2　墓の年代別変移（家紋，宗教）

建立年	墓の数	家紋			宗教				
		なし	オリジナル	日本風	なし	儒教的	仏教的	キリスト教	仏教儒教混合
1960年代	21	14	3	4	9	3	6	2	1
1970年代	52	29	16	7	26	10	13	1	2
1980年代	8	3	1	4	1	4	1	2	0
1990年代	9	3	4	2	8	0	1	0	0
2000年代	9	4	4	1	7	1	1	0	0
不明	6	4	2	0	1	3	0	2	0
合計	105	57	30	18	52	21	22	7	3

（2010年，2011年筆者調査により作成）

一の手段になっているのではないかと考えたが，本貫や本籍地が伝わっていないように，このような書式も伝わっていないとも考えられる。

最初の年代のほうが，宗教色の濃いものがあるが，現代の日本の風潮と同じく，無宗教的になってきている。早い年代のほうが戒名や梵字がついているのは，寺を墓の安置場所としていた都合もあったのではないかと思われる。

第7章　家紋について

本来朝鮮半島には日本でいう家紋のようなものはない。本霊園の在日コリアンの半数以上の墓は紋をつけていない。(表2参照)

全体の2割ほどが日本風の家紋を付けている。現在の聞き取りの段階では，墓石を作るときに必ず紋はどうするのか聞かれる。そのとき無難な紋をつけることになるようだが，鷹の羽や花菱などの一般的な紋と並んで，五三桐の紋も7基あった。朝鮮半島にとっては侵略者である豊臣秀吉の紋である。ここには宿敵秀吉との認識はなく，むしろ「難波の関白様」という人気者が理由かもしれない。

オリジナルの家紋をつけている墓が全体の3分の1あった。形式はさまざまである。石に刻まれたものであるので，わかりにくいものも多かったが，スケッチをして時間をおいて見ると，漢字をデザインしていることがあとでわかるなど，個性が現れた独特のものになっている。

オリジナルの30のうち，姓の一字をデフォルメしてマークのようにしたものが14，本貫をマークにしたものが9，通称名をつけたものが2，独特のものが5あった。その5つのうち2基は太極旗のように陰陽を素材にそれぞれ独自にデザインしたものであった。

姓をデザインしたものでも，姓を丸で囲む，漢字をデザインするなど，同じ苗字でも家によって違う。たいへん個性的なものになっている。

在日２世の女性から，父親の本名では寺に墓を作らせてもらえず，日本人である母親の名前を使って作ったという話しを聞いた。そのときの唯一の自己表現として太極を家紋代わりにデザインした，ということであった。同じ形態かどうかはわからないが，やはり太極のデザインが２基あったことは興味深い。この２つは１基は本名の墓，１基は通称名の墓である。

お わ り に

在日コリアンの墓は仁川国際霊園の中でかたまって位置しているわけではない。稀に親戚であろうと思われる墓が，並んでいたり同じ敷地内にある場合もあるが，おおむねばらばらに建立されており，集団的ではなく個人的な情報のもとに建立されたようすがわかる。

霊園の一番奥にはキリスト教団における6.0メートル×4.5メートルの納骨堂があり，男女それぞれ数名の名前だけが記されている。韓国民団宝塚支部での聞き取りによると，霊園のかなり早い段階で作られたもので，行き所のなかった骨をようやく納めることができたということであった。

墓本体については，朝鮮半島をルーツに持つこだわりや，墓を通じて自分のアイデンティティを確認するために，さまざまに墓に刻まれたものがあるのではないかと予測していたが[3]，図４，図５に挙げたように思いのほかその情報量は少なかった。在日コリアンのための専用墓地ではなく，日本人と一緒の霊園ということが考えられる。つまり一般日本人の中の墓と，在日コリアンとしての区画が明らかな墓地とでは，墓の表現するものも違っているのかもしれない。大阪には在日コリアンが墓を持つ多くの霊

3）「日本人の墓には見られないような故人に関するさまざまなデータが刻まれており，四面全部が文字に埋め尽くされているケースも珍しくない」（李仁子「異文化における移住者のアイデンティティ表現の重層性」『民族学研究』61－3，1996年12月）

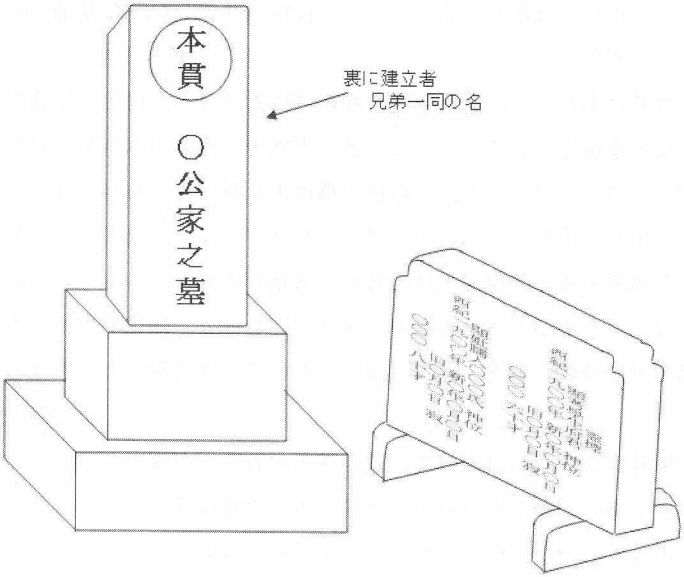

図4　比較的墓に刻まれた記載の多い事例

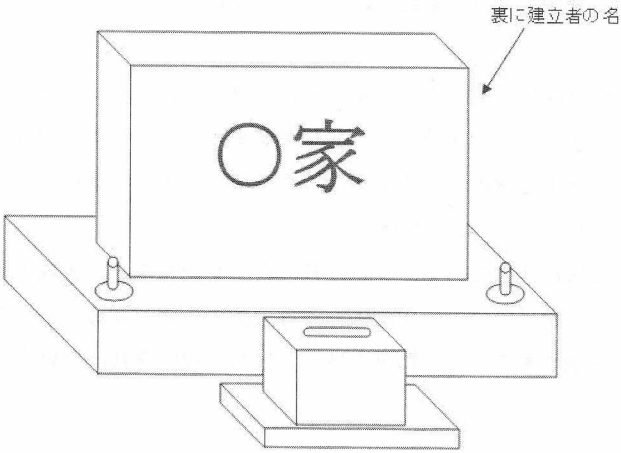

図5　最もシンプルな例

園があり，現在では新しく造営されて，在日コリアン専門の墓地の紹介も行われている[4)]。

墓を作るにあたって，朝鮮半島の様式に拘るよりも，自分の生活の中での自然な形を選んでいる。このことは，当然といえば当然かもしれない。

年配の在日コリアンの方に，在日の墓はよく見ないとわからない，と言われた。本名や本貫がすべて入っているわけではなく，選択的に記載されているからである。通称名だけの墓や，国籍変更による日本の名前の記載だけでは，もうそのルーツを探すすべはないわけで，帰化や日本人との国際結婚の増加を考えると，それは現代における当然の流れといわざるを得ない。

今回興味深かったのは家紋で，豊臣秀吉の五三桐が幾つかついていたことは驚きであったが，それ以上にオリジナルの家紋を作っていたことは予想外であった。分かりやすいマークのようなものもあれば，一目ではわからないものもあり，そこには墓を建立するときの家族の思いが込められているようである。儒教式の墓誌や本貫，本籍地にはあまり馴染みがなくても，自由な発想で独自の家紋を作ることで在日コリアンとして自己確立している。

仁川国際霊園は区画によって墓の形式も違っている。シンプルな墓ばかりがある一角と，霊標を持つような墓が集まっている一角は明確に区別されている。区画を選択する段階で，故人や遺族の思いを選択しているのだろうと思われる。(図4，5参照)

現在の宝塚在住の在日コリアンに墓の在所を訊ねると，宝塚市営の長尾山霊園が圧倒的に多い。仁川国際霊園は公営の霊園が建設される前にできた私営の霊園である。ここに墓を持つ人はある程度金銭的にゆとりのある

4） 大阪や奈良県生駒の地に在日コリアンの墓が多い。在日同胞のためのメモリアルパークと銘打って新しい公園墓地の呼びかけも大阪で行われている。

人という印象がその当時の在日コリアンにあったそうだ。

平日でもお参りをする人が多く，正月に行ってみると，花や線香の様子から半数以上がお参りをしている跡が見えた。武庫川とその支流に挟まれた日当たりの良い平地で，国際霊園という名前にようやく故人の安住の地を見つけた在日コリアンの姿が垣間見えるようだ。

在日コリアンの墓の形態の特徴を墓に記載された事項や，家紋，宗教で見てきた。独自の出自に拘って自己表現をするというよりも，日本の時代の流れにそって，現実的に生きているようすが，名前の記載や，墓の形態でうかがい知ることができる。

葬式を簡略に済ませ，墓も持たない世代がこれからの日本で多くなっていくと思われるが，その中で，在日コリアンの墓の形態はどのようになっていくのだろうか。

北朝鮮に在日1世の父親の骨を持っていっており，統一が実現したら本来の故郷である韓国の地に埋めてほしいという遺言を守っている在日2世もいる。

墓に現れたもの，これから墓に現れるものに注目していかなければならない。

参考文献

1　李仁子「異文化における移住者のアイデンティティ表現の重層性――在日韓国・朝鮮人の墓をめぐって――」(『民族学研究』61－3，1996年12月)
2　井上治代『墓をめぐる家族論』(平凡社，2000年)
3　国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会編『在日コリアン辞典』(明石書店，2010年)
4　民族名をとりもどす会編『民族名をとりもどした日本籍朝鮮人』(明石書店，1990年)
5　森　謙二『墓と葬送の社会史』(講談社　1993年)

6　森岡清美監修，石原邦雄 / 佐竹洋人 / 堤マサエ / 望月嵩 共編『家族社会学の展開』（培風館，1993 年）
7　関成和「ウリナラの冠婚葬祭」（（株）豊田商店 1997 年，非売品）
8　鄭鴻永『歌劇の街のもうひとつの歴史　宝塚と朝鮮人』（神戸学生・青年センター出版部，1997 年）
9　鄭暎惠「［書評］李仁子 異文化における移住者のアイデンティティ表現の重層性」（『コリアンマイノリティ研究』第 1 号，新幹社，1998 年 1 月）